

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：34601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02481

研究課題名(和文) 大名家を介した地域文化と都市演劇文化交流史の研究

研究課題名(英文) Research on the history of cultural exchanges between local culture and urban theater through the daimyo family

研究代表者

後藤 博子 (Goto, Hiroko)

帝塚山大学・文学部・教授

研究者番号：80610237

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)： 対馬藩において、江戸藩邸で享受されていた演劇文化が国元に取り入れられていた事例に注目し、実態を把握するための基本情報として、対馬藩宗家文書『江戸藩邸毎日記』から抽出した歌舞伎・浄瑠璃等上演記事を享保二十年まで翻刻紹介した。

都市演劇文化の具体例として、江戸の古浄瑠璃の絵看板を取り上げ、虎屋小源太夫座「ゑんやの小次郎夜討対決」上演時のものであることを明らかにし、絵入り浄瑠璃本とあわせて考証することで、上演実態を究明した。さらに、鳥取藩士の日記を分析して、江戸詰で歌舞伎を観劇していた様相を明らかにした。大和郡山藩主柳澤信鴻の『松平美濃守日誌』から演劇文化に関係する記事を抽出し、分析を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

対馬藩邸の歌舞伎・人形浄瑠璃上演記事は寛永五年(1628)から享保二十年(1735)までの長期間にわたり、具体的な情報が豊富で、江戸の演劇史を明らかにするための基本資料となる。対馬藩の国元の文化に与えた影響の解明にもつながる。

古浄瑠璃の絵看板は演劇資料としてだけでなく、菱川師宣工房の制作という点で美術史においても注目されてきた。本研究により、演目の内容や浄瑠璃座の動向を明らかにしたことで、絵看板制作の実態解明についても具体的な見通しが得られた。

鳥取藩士の日記と『松平美濃守日誌』について調査を進め、演劇資料としてだけでなく、鳥取藩、大和郡山藩

研究成果の概要(英文)： In the Tsushima domain, I focused on the case where the drama culture that was enjoyed at the Edo domain residence was adopted at Tsushima, and as basic information to understand the actual situation, I extracted the kabuki and joruri extracted from the Tsushima domain document "Edo Hantei Mainichiki". I reprinted and introduced performance articles such as kabuki and Joruri until 1925.

As a concrete example of urban theater culture, we take up old joruri picture signs on Edo, clarify that they are from the time of the Toraya Kogendayuzza performance of "Enya no Kojiro youchi taiketsu", and examine them together with illustrated joruri books. In this way, the reality of the performance was clarified.

Furthermore, by analyzing the diary of a feudal retainer of Tottori, he clarified how he watched Kabuki in Edo. Articles related to theater culture were extracted from "Matsudaira Minonokami Nisshi" written by Nobutoki Yanagisawa, the feudal lord of Yamatokoriyama, and analyzed.

研究分野：日本近世文学

キーワード：演劇文化 人形浄瑠璃 歌舞伎 対馬藩 古浄瑠璃絵看板 鳥取藩 大和郡山藩 松平美濃守日誌

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究の前段階として、近世の江戸の演劇文化を研究するための基本資料となる上演記録のデータを蓄積してきた。対馬藩・鳥取藩・加賀藩・岡山藩などの藩政史料から、江戸における歌舞伎や人形浄瑠璃の関係記事を多数収集し、上演記録データベースを作成している。これらのデータは、第一に江戸演劇史を精確に捉えることに有効であり、第二に地方文化史研究の発展にも寄与できるとの見通しが得られた。そこで、各藩の国元における記録に対しても調査を進め、江戸における都市演劇文化の形成が地方芸能文化形成に与えた影響関係について具体的な事例を見出した。対馬藩と鳥取藩の事例を分析することで、それぞれ江戸において都市演劇文化をどのように享受していたか、それらが国元の文化にどのような影響を与えたか、具体的に究明することが期待された。

(2)大和郡山藩主柳澤信鴻の『松平美濃守日誌』(柳澤文庫所蔵)の調査に着手し、柳澤信鴻が国元で大坂から浄瑠璃太夫を呼んで浄瑠璃を語らせていた記事が頻出すること、さらに、自らも浄瑠璃を稽古するようになった事例を見出した。柳澤信鴻については、隠居後の『宴遊日記』『松鶴日記』が知られ、天明期の江戸六義園で近世演劇を愛好する様子について注目されてきた。本資料は柳澤信鴻が15歳から44歳まで詳細に記録し続けた日誌であり、藩主となってから浄瑠璃への傾倒が目立つようになったことなどが読み取れるが、これまで演劇や文化面では知られていなかった。本研究により、柳澤信鴻の藩主時代の演劇愛好の実態を明らかにし、上方の都市演劇文化の形成が国元に与えた影響についても検証できるとの見通しが立てられた。さらに、浄瑠璃史研究の貴重な情報源になることも期待された。

(3)都市演劇文化がどのようなものであったか、その実態を知る具体例として、「浄瑠璃芝居看板絵屏風」(出光美術館所蔵)に着目した。本資料は古浄瑠璃の芝居小屋で実際に掲げられていた絵看板が伝存する唯一の例として演劇研究において重視されてきた。さらに、菱川師宣工房が制作した絵看板として、美術史においても注目を集めてきたが、絵看板が描いた演目について詳細不明であり、研究が進んでいなかった。しかし、イェール大学バイネキ稀覯本・手稿本図書館所蔵の絵入り浄瑠璃本『ゑんやの小次郎夜討対決』を見出したことによって、絵看板が演目をどのように描いたのか、制作の実態を解明する可能性が出てきた。(1)にあげた上演記録データベースなどを用いて虎屋小源太夫座の動向について検証することで、本演目が上演され、絵看板が制作された時期についても明らかにできると考えられた。

2. 研究の目的

(1)対馬藩において、江戸の藩邸で歌舞伎や人形浄瑠璃といった演劇文化がどのように享受されていたかを把握した上で、国元で演じられるようになった小姓による人形操りが、名家の主導で導入された経緯を明らかにする。対馬藩の江戸藩邸において人形操りを上演していた演者たちが、宗家の依頼によって、小姓たちに人形操りを指導した可能性が想定される。藩主が隠居して国元へ帰るタイミングで小姓操りが始まっていることから、人形操りという都市演劇文化を小姓操りという形で国元に持ち帰ろうとする藩主の意向が働いていたことを検証する。さらに、国元の芸能文化に与えた影響についても検証する。

「覚書」(鳥取県立図書館所蔵)は元禄期の鳥取藩士森藤十郎の日記の写本であると推定される。さらに森藤十郎について調査を進め、江戸詰の生活の中で芝居町に出かけて歌舞伎を観ていた記事の文化的な意義を明らかにする。地方から江戸へ出てきた武士が代表的な都市演劇文化である歌舞伎の観劇に魅力を感じていた実態についても具体的に検証する。

(2)柳澤信鴻の『松平美濃守日誌』の分析を進め、信鴻が大和郡山藩主であった時期に義太夫節の浄瑠璃に傾倒していた実態を明らかにする。大坂から浄瑠璃太夫を招いて、初演されたばかりの新作の浄瑠璃を語らせることを月に1,2回という頻度で行っていたことや、自ら稽古を行うようになっていく経緯を検証する。さらに藩主が浄瑠璃を愛好し、おさらいの会を催していたことなどが、大和郡山藩の国元の文化に影響を与えた可能性についても検討する。さらに、新作の浄瑠璃の演目名の情報が豊富に確認できることから、各作品の初演年代推定にも有効な資料であると考えられる。

(3)虎屋小源太夫の絵入り浄瑠璃本「ゑんやの小次郎夜討対決」の内容を検証し、江戸の古浄瑠璃史に位置づける。さらに絵看板との照合を行い、対応関係を明らかにして、浄瑠璃が初演されるにあたって絵看板が制作された実態を究明する。さらに、虎屋小源太夫の動向や操り座を興行していた時期を検証して、本演目が上演され、絵看板が制作された時期についても推定する。

3. 研究の方法

(1) 対馬藩宗家文書の江戸藩邸毎日記（東大史料編纂所蔵）から抽出した演劇上演記事について翻刻し、上演記録データベースを用いて、各記事の情報を演劇史に意義づけていく。国元における記録類（対馬歴史民俗資料館・長崎県対馬歴史研究センター蔵）を調査し、小姓操りの上演記事や関連記事を抽出して、実態の解明を進める。

鳥取県立博物館蔵の鳥取藩政史料を調査し、鳥取藩士森藤十郎による「覚書」（鳥取県立図書館蔵）の記事の内容について検証していく。森藤十郎が祐筆として召し出された経緯や江戸詰を命じられた事情、鳥取から江戸へ向かった道中、江戸詰の生活などについて具体的に調査した上で、江戸において歌舞伎を観劇していた記事の意義を地方武士の都市演劇文化享受という観点で位置づける。さらに、「覚書」の記述によって得られる情報が、江戸演劇史においてどのような意味を持つか、新見につながる可能性についても検証する。

(2) 『松平美濃守日誌』（柳澤文庫蔵）の調査を進め、演劇関係記事を抽出する。柳澤文庫蔵の藩政史料や公的日記などを調査し、柳澤信鴻が浄瑠璃に傾倒していった時期が藩主になってから始まっていることの意義を考証する。さらに、本資料に記載されている浄瑠璃作品のデータを一作ごとに浄瑠璃史において確認し、初演時期を推定する。大坂から最新の演劇文化を摂取していた可能性を究明し、柳澤信鴻の嗜好が大和郡山藩の国元の文化に影響を与えた事例についても探究していく。

(3) 絵入り浄瑠璃本『ゑんやの小次郎夜討対決』（イェール大学バイネキ稀覯本・手稿本図書館蔵）と「浄瑠璃芝居看板絵屏風」（出光美術館蔵）について調査した成果をもとに、絵入り浄瑠璃本を翻刻し、作品内容を分析し、絵看板との対応関係を確認する。さらに、上演記録データベースと照合して虎屋小源太夫の動向を集約し、本作の上演時期を推定する。その上で、作品内容を浄瑠璃史上に位置づける。絵看板の制作が浄瑠璃座からの依頼によって、具体的にどのように行われていたのか、考証を進める。

4. 研究成果

(1) 対馬藩宗家文書の江戸藩邸毎日記から抽出した歌舞伎・浄瑠璃等上演記事を、寛永五年から享保二十年まで翻刻紹介し、情報を整理した。あわせて、国元の資料の調査を進めたが、対馬歴史民俗資料館が2017年3月31日をもって休館し、対馬博物館・長崎県対馬歴史研究センター開館のための整備に入ったため、調査を一時中断することとなった。それまでに収集していた資料の分析と整理を行い、藩主の生母や娘といった家族が旅行の際に京などの都市で歌舞伎や人形浄瑠璃を観覧していた事例などを見出した。大名家の演劇文化受容の実態を具体的に示す事例として注目される。

(2) 「覚書」（鳥取県立図書館蔵）を検証し、鳥取藩士森藤十郎の日記の写本であることを推定した。さらに、天保期に岡島正義が編纂した『因府年表』において、「森氏の日記」として参照されていることも指摘した。鳥取藩史を明らかにする一次資料として有意義であるとの見通しを得た。さらに、江戸詰の藩士の生活状況を知る上でも貴重な資料となることを確認した。森藤十郎が江戸で観劇した歌舞伎について、評判記や狂言本、番付といった演劇資料と照らし合わせ、「覚書」の記述によって、歌舞伎の上演内容が狂言本に記載された内容から変更されている事例が確認できることなどを見出した。観客の反応や評判によって、臨機応変に演出などを変更していた実態を明らかにする手がかりとなる新見である。

(3) 『松平美濃守日誌』の演劇関係記事を整理し、記載される浄瑠璃作品の情報を集約し、浄瑠璃史上に位置づけた。『松平美濃守日誌』の撮影と翻刻紹介を計画していたが、コロナ禍によって継続的な調査や撮影が困難になったため、それまでに収集していた情報を整理し、検証するにとどまった。

(4) 絵入り浄瑠璃本『ゑんやの小次郎夜討対決』を翻刻紹介した。「浄瑠璃芝居看板絵屏風」の六枚の絵看板のうちの四枚が本作を描いたものであることを明らかにし、対応関係を具体的に示した。本来は六枚一組の絵看板として制作され、使用されていた可能性が高いと考えられる。作品内容への十分な理解に基づいて詳細に描かれていることから、絵看板制作の依頼にあたって、浄瑠璃座側から下絵などの指定があった可能性を指摘した。さらに虎屋小源太夫の動向を盛岡藩『雑書』などの上演記録や、「木挽町水帳写」によって考証し、虎屋小源太夫が操り座を興行していた時期について、延宝八年（1680）二月から天和二年（1682）六月までの期間内の一時期であると推定した。本作が延宝三年刊の雑史『鎌倉北条九代記』の最明寺殿説話に依拠していることを指摘し、鎌倉北条史に関連する作品群の一部として構想されていた可能性を示した。本事例からは、師宣工房が浄瑠璃座から上演予定の演目について、絵看板と絵入り浄瑠璃本の挿絵の制作を依頼され、併行して作業を進めていたことも推測される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 後藤博子	4. 巻 44
2. 論文標題 対馬宗家文書『江戸藩邸毎日記』歌舞伎・浄瑠璃等上演記事（正徳元年から享保二十年まで）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 演劇研究会会報	6. 最初と最後の頁 37～55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤博子	4. 巻 43
2. 論文標題 対馬宗家文書『江戸藩邸毎日記』歌舞伎・浄瑠璃等上演記事（元禄十五年から宝永六年まで）	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 演劇研究会会報	6. 最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤博子	4. 巻 185
2. 論文標題 古浄瑠璃「ゑんやの小次郎夜討対決」の絵入本と絵看板	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 浮世絵芸術	6. 最初と最後の頁 5-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 後藤博子	4. 巻 185
2. 論文標題 資料紹介・絵入浄瑠璃本『ゑんやの小次郎夜討対決』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 浮世絵芸術	6. 最初と最後の頁 20-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 後藤博子
2. 発表標題 大名屋敷における歌舞伎 見物客たち
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------